

北陸大学ライブラリーセンター報

Bulletin NO.13

⇒をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 第1回北陸大学読書感想文コンクール入賞者
＜入賞者10名を発表＞

⇒ 表彰式挨拶

北野 与一(ライブラリーセンター長)

⇒ 《最優秀賞》「月と六ペンス」を読んで

米山 暁寛(外国語学部 英米語学科 3年次生)

⇒ 《優秀賞》「病院で死ぬということ」を読んで

松野佐江子(薬学部 衛生薬学科 3年次生)

⇒ 《優秀賞》「上海コロッケ横丁」を読んで

丸次 弘子(外国語学部 中国語学科 3年次生)

⇒ 《優秀賞》「心を支える詩人」

小野塚翔栄(外国語学部 中国語学科 2年次生)

⇒ 《優秀賞》「人との出会いが示すもの」

坂本 紀子(外国語学部 中国語学科 2年次生)

⇒ 「織作峰子の写真術」受講者による写真展開催

< Bulletin NO.14 >



北陸大学ライブラリーセンター報
1st-Half 2002



第1回北陸大学読書感想文コンクール 入賞者10名を表彰

昨年度、北陸大学学生を対象にした第1回「北陸大学読書感想文コンクール」を実施しました。締め切りの10月末日までに78点の応募があり、延べ3回にわたる厳正な審査を行いました。審査には、村上良夫外国語学部教授（審査委員長）、紺谷仁薬学部教授、瀧澤正己外国語学部教授、北村喜義法学部教授の4氏があたり、審査の結果、次のとおり最優秀賞1点・優秀賞4点・佳作5点を入賞と決定し、1月31日（木）午後12時45分からライブラリーセンターで表彰式を行い、入賞者に賞状と副賞が渡されました。また、応募者の皆さんには、参加賞（図書カード）を後日お渡ししました。

なお、このコンクールの目的等は、次頁掲載の表彰時における北野ライブラリーセンター長の挨拶の中で述べさせていただきます。



入賞作品

📖 最優秀賞（1名）

『月と六ペンス』を読んで

米山 暁寛（外国語学部 英米語学科 3年次生）

📖 優秀賞（4名）

『病院で死ぬということ』を読んで

松野佐江子（薬学部 衛生薬学科 3年次生）

『上海コロッケ横丁』を読んで

丸次 弘子（外国語学部 中国語学科 3年次生）

「心を支える詩人」

小野塚翔栄（外国語学部 中国語学科 2年次生）

「人との出会いが示すもの」

坂本 紀子（外国語学部 中国語学科 2年次生）

📖 佳作（5名）

「美しい人間」(『白痴』)

鈴木 雄一（外国語学部 英米語学科 4年次生）

『もの食う人びと』から伝えられて

畑川 寧子（外国語学部 中国語学科 4年次生）

『上海生活実感』を読んで

吉澤 直子（外国語学部 中国語学科 3年次生）

『異邦の騎士』を読んで

中村みず江（法学部 法律学科 2年次生）

『二十四の瞳』を読んで

山根 祥子（法学部 法律学科 2年次生）

表彰式挨拶

ライブラリーセンター長 北野 与一

第1回読書感想文コンクールに入選された皆さん、おめでとうございます。

このコンクールの趣旨は、このライブラリーを利用する学生諸君の読書欲を刺激し、知力の向上に寄与しようとするものです。

周知の通り、身体や体力をトレーニングし鍛えるためには、体育施設等が活用されます。同じように、知力や考える力をトレーニングし鍛えるためには、読書が最適であり、必要不可欠なのです。ライブラリーは、そのための宝庫であります。

皆さんは、われわれのこうした趣旨に賛同され、立派な感想文を提出されて見事に入賞されました。主催したわれわれは勿論のこと、後援していただいた学術資料委員会の先生方も大変喜んでおり、皆さんをはじめ応募された全ての学生に心から敬意を表する次第です。

第2回のコンクールには、さらなる研鑽を積み、審査員の先生方に認められる立派な感想文を再び提出されるよう期待しております。なお、優秀賞までの作品は、「ライブラリーセンター報」に掲載しますので、了承してください。簡単ではありますが、お礼と希望を述べて挨拶といたします。



(北野ライブラリーセンター長 挨拶)



(村上審査委員長 講評)

最優秀賞

『月と六ペンス』を読んで

米山 暁寛



著者 William Somerset Maugham 訳：阿部 知二

出版社 岩波書店

僕が今回モームを読もうと思ったのは、英語翻訳の授業でモームの作品に触れる機会があったから、なんとなくモームに親しみを持つようになっていたからだ。しかし授業では短編しか読んでことがなかったので、今回彼の代表作を読んでみるいい機会だと思い、この作品を選んだ。彼が書く英語はとても難しく、授業ではとても苦労したが、自分のへたくそな和訳とは違う、プロの翻訳作品を読んでみるのも面白いと思った。

この本を読み終わって最初に思った感想は、重厚な内容だった、ということだ。タイトルから想像していた内容は、空想的な物語だった。しかし実際は、普通の男であるチャールズ・ストリ克蘭ドが突然、家族や地位を捨て、他人を不愉快にさせる変わり者の天才画家になっていくという内容だった。さわやかで不思議な空想的物語なんてとんでもない想像だった。

また、このタイトルが意味するものは読み終わってみてもさっぱりわからなかった。「月」や「六ペンス」が重要な意味を持って登場してきた記憶はないし、何か暗示していたものも思い当たらない。そう思いながら訳者のあとがきを読んでみると、『月』には『手の届かぬもの』、『六ペンス』は『世俗的な取るに足らぬ値打ちしかないもの』といった意味であろうか、というくだりがあった。そういうヒントをもらうと、思い当たるところがいくつか出てきた。ストリ克蘭ドの存在によってその周囲は混乱し、傷つき、苦悩していくが、一方で彼自身は自分の捜し求める究極の美、芸術を追い求めてやりたい放題にやっていく。彼から見れば追い求めているものは「月」であり、家族、友人、金、地位、家、自分自身も「六ペンス」なのだろう。また、そういうストリ克蘭ドが「月」であり、そうでない、世間の様々なことにとられる我々は「六ペンス」なのだという作者モームの考え方も込められているのかもしれない。この作品の中で話を語っていくのは作家という仕事をしている、「私」であるが、その「私」の考え方の描写の中に、そう思わせるところがあった。

この「私」の意見や考え方としてかかれているのは、とても正確なものだと思った。人間というものの本質をよくとらえていたと思う。自分に当てはめて何回もドキッとすることがあった。中には思わず笑ってしまうものもあって、「恋人として男と女が違う点は、女は一日中恋愛をされているが、男は時々しかできないということである。」という部分がある。そうかもしれないなと思い、つい笑ってしまった。また、数多くの人物が登場するが、その人物描写もとても細かく印象的だった。

また、モームの特徴のひとつだと思うが、何かを説明するのにまったく突拍子もない例えをだしてくる。例えばバナナの木のを「ある皇后のぼろぼろの衣装のような」といってみたりだ。授業で先生がモームは皮肉屋だといっていたのが、よくわかるような気がした。細かく的確な世の中や人物の描写にも、どこか皮肉さが感じられた。また、「私はこう思う」、「こう推測する」、「間違いなく何やらしかった」、などと

いっておきながら、最後に「しかしそんなことは私が計り知れるはずもなく…」というふうにはっきり返してみるところも、どこか皮肉屋のやるところだと思う。こういったところも印象に残った。

この作品は画家ゴーギャンの生涯に暗示を受けて書いた作品だそうだ。ゴーギャンの経歴を調べてみたが、確かにストリ克蘭ドの設定と重なる部分が数多くあった。長年暮らしたロンドン、パリを遠く離れた南の島タヒチで、ライ病にかかり目が見えなくなっても死ぬまで絵をかきつづけ、最後に追い求めている芸術に到達したストリ克蘭ドには、文章作品という芸術に携わる、作者の強い強い気持ちがうつしこまれているように感じた。



寄 贈 図 書

本学の教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。ありがとうございました。

著 者	書 名	寄 贈 者
薬科学大辞典編集委員会編	広川薬科学大辞典 第3版	河島 進(学長・薬学部教授)
河島進ほか編集	医薬品情報・評価学	河島 進(学長・薬学部教授)
今出鉄夫ほか共著	基礎微分積分学	小嶋 迪孝(薬学部教授)
佐藤耕次郎編著	基礎線形代数学	小嶋 迪孝(薬学部教授)
渡部隆一、深見哲造共著	文科系の数学 第4版	小嶋 迪孝(薬学部教授)
梅沢敏夫著	やさしい線形代数	小嶋 迪孝(薬学部教授)
小寺平治著	新統計入門	小嶋 迪孝(薬学部教授)
宮本悦子、大嶋耐之著	薬剤師がつくる薬局・ドラッグストアのPOPバイブル	宮本 悦子(薬学部教授) 大嶋 耐之(薬学部助教授)
上島国利著	抗不安薬の知識と使い方 改訂3版	毛利 哲郎(薬学部教授)
鹿島正裕編	21世紀の世界と日本	叶 秋男(法学部教授)
川上高司著	国際秩序の解体と統合	川上 高司(法学部教授)
川上高司著	米国の対日政策	川上 高司(法学部教授)
花井等ほか著	現代アメリカ政治の分析	川上 高司(法学部教授)
マイケルグリーン、パトリック・クロニ編	日米同盟	川上 高司(法学部教授)
坂本正弘、滝田賢治編著	現代アメリカ外交の研究	川上 高司(法学部教授)
Michael D. Swaine, Rachel M. Swanger, Takashi Kawakami	Japan and ballistic missile defense	川上 高司(法学部教授)



優秀賞

『病院で死ぬということ』を読んで

松野佐江子



著者 山崎 章郎

出版社 主婦の友社

世の中には多くの「望み」があるが、それは全て叶えられるものではない。そのために人は「絞込み」をする。大切なものから「優先順位」をつけて叶えようとするのだ。

医療の中で最も優先されるべきものは「生命」であると考え。患者は「これからの自分」を信じるべきであり、医療者は「患者の未来」を大切にしなければならない。

私はこの本を読み、「医療とは？」という前に前述のような答えを出した。この本には生命の期限が短い患者についての様々なケースが書かれている。そして著者は「患者」の望むケースを大切にしていた。当たり前のことだが、現在の「医療者の行為」は「患者の望み」を満たさない場合が多い。「患者の望み」という列車は自身の意思に関係なく「医療者の行為」というレールを走らされ、後に「悲惨な事故」を起こすのだ。生命の期限の短い患者のケースによく聞く話だ。著者の考え方が本来の医療の姿だが、「理想」で終わるケースが少なくない。

ここでいう「生命」は生きていくだけの命でなく、輝きをプラスする。私は「生命」は輝くべきものであるから。輝きのある生命を持つ人とは「生きがい」を感じ、それに向かって行動することが可能な人であると考え。そしてそのことは「日常」という形を作る。私たちは生きていく限り、なんらかの「跡」を残し、「跡」はなんらかの形となる。それはどんなことであれ、自分が生きてきた証となり、これからへと繋がる。また「日常」における人との繋がりは自分の存在を確認させるだろう。こうして人は自分を感じながら生きていくのだと考える。

しかし病気になればこの状況は変わる。行動が制約され、今まで普通にやってきた事が普通でなくなるのだ。このことはこれからの道を険しく、狭いものにし、時には諦めなくてはならなくなる。私はこの状況に自分を置いてみた。悲しくて、怖くなったが、自分は何ができるか考えていた。残された時間はとても大切に、希望は全て叶えたいと思った。

そのために何が必要か？「医療」である。例えば日常生活に支障をきたすような痛みが私を襲うなら、その痛みを取り除いて欲しい。そうして私は気付いた。「生きる」ために自分は自分で動かしたい。

死は「医療の敗北」とされ、緩和ケアやターミナルケアは「敗北の医療」とされてきた。しかし生きていく限り死は避けられないし、残された時間をいかに過ごすかは生きてきた跡を残す。「敗北」という言葉の裏に、医療者が自分の時間が少ししかない時のことを考えた形跡はあるのだろうか？考えて現在があるのなら仕方ないが、私はそうではないと思っている。平成2年に一人の医師によって書かれたこの本が今も患者やその家族に支援されていると聞くからだ。また「患者がその生の終わりを住み慣れた愛する環境で過ごすことを許されるならば患者のために環境を調整することはほとんどいらない。家族は彼をよく知っているから鎮痛剤の代わりに一杯のブドウ酒をついでやるだろう。家で作ったスープの香りは、彼の

食欲を刺激し、二さじか三さじ液体がのどを通るかもしれない。それは輸血よりも彼にとっては、はるかにうれしいことではないだろうか」という文章で著者は後ろめたかった延命治療にピリオドを打ち、「医療者以外の一般の人々にとっては、そのようなことはあたりまえかもしれないので、なぜ僕が感動したか、不思議に思うかもしれない」と続けたからだ。そして著者は「最後まで人間らしく生き抜く場所」を「ホスピス」と言い、ホスピス医になった。

世の中は裕福になった。欲しいものはたいていお金で手に入る。医療とは関係ない仕事を持つ友達が私に「医療は大変な進歩を遂げたが、人間の手でなければ発達しない分野はまだまだだね」と言った。そして彼はこの夏入院した母親を思いながら「病院は本当に味気ないね」ともらした。私は医療者の患者を思う気持ちは患者に響いてないかと、感じた。医療者は患者にもっと向き合うべきであり、患者は医療者に自ら歩み寄らねばならないと考えた。そしてその先で医療の中でも大切にされている「輝いている生命」の姿を見た気がした。

私は病気によって狭められてゆく患者の日常を広げる薬剤師になりたいと考えている。どんな時でも生命は輝き続けるものであるということを少しでも多くの人に伝えたいからだ。そして最後まで生命を輝かせようとしている患者の力になりたい。



審査委員から一言

法学部教授
北村喜義

優れた文芸作品に対する感想文がその文芸作品の内容水準を凌駕することは有り得ない。つまり、(ドストエフスキー) 評論家は
を超えること能わずである。しかし、近づくことはできる。読書人たるべき選考員の鑑識を潜り抜けた感想文の何れもが、その思考力と表現力の秀逸性のみならず、作品が与う選択課題と自己成長過程における問題意識との邂逅を綴らざるを得ない地熱を伝えるものであった。その地熱は Elias Canetti (エリアス・カネッティ) の次の言葉に引き継がれよう。「秘かに暮らし、生涯読み続け、書き続け、それについて誰にも語らないこと」。とどのつまり、今回の読書感想文選考によって私は自己の高貴なる嘘から低劣なる嘘への転落の自覚による敗北を、Clever House の天才との再度の邂逅によって癒さざる得ない Impuls が与えられた。それ程の秀作を寄せて頂いた応募者諸氏に感謝している。Elias Canetti の言葉の期待は世俗の選別ではない自己の自己選別による発展である。わが共に歩みし学生諸氏の成長を確認したる喜びをここに伝えたい。

エリアス・カネッティ (ブルガリア生まれのノーベル賞作家)

外国語学部教授
瀧澤正己

第一回読書感想文コンクールとしては予想以上の78編の応募があり、寄せられた作品も古典小説からハウツー物の感想文まで、現代の様々な価値観を裏付けるかごとく多岐に渡る内容であった。規定を満たした応募作品全てを4人の審査委員全員が目を通したが、さすがに最終審査に残った作品は内容的に甲乙付けがたい優れたものがあった。取り分け当審査委員の目を引いたのは『月と六ペンス』を読んでであった。モームのこの作品を読むに至った経緯から、「六ペンス」が何を象徴しているのか、モームの人柄をこの作品の中に見出し、自分の言葉で素直に無理なく表現している点に感銘を受けた。その点においては、他の審査委員の先生方も異論はないであろう。

優秀賞

『上海コロッケ横丁』を読んで

丸次 弘子



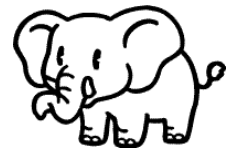
著者 鈴木 常勝

出版社 新泉社

「上海コロッケ横丁」は、中国で人気のある夕刊紙、「新民晩報」の、おもしろいコラムを集めた本です。上海という街は、私自身、短期留学で行ったことがあります。その短い期間でも上海人のおもしろさを体験することができました。この本には、そういう上海人の暮らしぶりがたくさんつまっていて、覗き見ることのできない上海人の生活や家庭を知ることができ、とても興味深く読むことができました。

まず、上海の家族。親子や夫婦などにまつわるおもしろい記事がたくさん載っていました。それらを読んでいて感じたことは、中国人も日本人も、家の中では家族が同じような会話をしているのだなあということです。家族の間での騒動など、読んでいるとまるで日本の下町に住む家族のこのように思えてきます。ただ、喧嘩の仕方は、中国人と日本人とで違いがあるようです。中国人は外に向けて喧嘩をするけど、日本人は内に向けて喧嘩をするという違いです。確かに日本人は近所に喧嘩の大声を聞かれたりするのを恥ずかしがる人が多いと思います。しかし中国人の場合は、平気で街中で大声を出し、他の人にもそれを聞いてもらい、野次馬を味方につけようとするそうです。私が上海に行った時も、街で大声を張り上げて口論している上海人の姿を見かけました。日本ではめったに見られない光景なので圧倒されましたが、そういうものがあってこそ上海の街が活気づき、楽しいものになっているのだと思いました。

この本には、日本帝国主義時代の、中国侵略に関する市民の記事も載せられています。これは現在でも、教科書問題や、靖国神社参拝問題などがあり、日本人もいろいろと考えなければならぬことだと思えます。私達は、戦時中の日本人のことは、テレビや本、映画やお年よりの話など、いろいろなものを通してよく知っていますが、当時の中国人の様子を知ろうとすることは少ないように思います。だからこれらの記事はいわば、中国人のお年よりの、貴重な話だと思って読みました。当時は上海の街でも抗日戦争が起こっていて、たくさんの方が亡くなったそうです。日本軍の捕虜になった人が、顔に「亡国奴」という文字を彫られ、何年も消すことができなかったという記事もありました。私はこの本を読んで初めて知ったのですが、江蘇省にある淮海会戦記念館には、坂本寅吉という国際主義戦士の英名が加えられているそうです。私は坂本寅吉という人の名前も知りませんでしたが、この人は日本人だけど侵略戦争勃発後、日本反戦同盟に加わったというのです。当時、そんな日本人もいたのだと驚きました。あと、東京に留学したことのある中国人は、上野動物園の象の心配をしたりもして、結局戦争はどちらの国にも傷跡を残しただけだったのだと思いました。



この本を読んでいると、もう一度上海に行きたいという気持ちが湧いてきました。題名にもなっているコロッケとは、上海のおばあちゃんが露店で揚げているコロッケで、大阪のたこ焼のような存在なのでしょう。上海人と大阪人が通じる場所がありそうだというのは、なんとなくわかるような気がします。私ももう一度上海に行って、「上海コロッケ」を味わってみたいです。

優秀賞

「心を支える詩人」

小野塚翔栄



書名 『中原中也全詩歌集』上・下

著者 中原 中也

出版社 講談社（文芸文庫）

「思えば遠く来たもんだ…」悲しみと呼ばれる心の底に流れる深い旋律に抱かれ、人はふと静寂とどこか懐かしい一瞬とめぐり合い、このような思いに襲われるのでしょうか。遠く、それは現実的な距離ではなく、人生の、自分自身の、魂の歩みといえる遠さ。幼い頃、人間の性善説を受け入れるとして、純粋なまだ何のものにも不信感と絶望感を抱かない、あの笑顔と晴れやかな大声で通りを駆けることのできた、故郷と過ごした過去の、つまり幸福なやさしい時代から自分は今こんなに遠く来てしまったと。「傷ついた魂の告白」人はよく彼、中原中也の詩を指してそういいます。たしかに彼の詩にはどこか寂しげな響きと雰囲気があります。人に受け入れられない（人は一理解し合えることのない生き物なのですが）自分、といった「詩人」としての自分を綴ることで自分を保ち、救っているような、静けさの中に淡々と、しかし美しい月明かりの下の川の輝きのように、まさしく人の心を包み込む魅力が彼の詩にはあります。「何か」を感じられる人間、過去の夢や理想から「遠く来て」しまった人々にとって、そんな彼の詩は美しくも幼い愚かさの、しかし人生で最も重要だったとさえいえる青春への郷愁を感じさせるものなのでしょう。

私が中原中也と初めて出会ったのは中学生の時の国語の教科書でした。しかし残念ながらその当時は彼の詩に対して特に強い印象は持ちませんでした。それからしばらくして、ふと今度は教科書の中の一冊ではなく、一冊の詩集として彼と再会したのです。その詩集を読み進めていくうちに私はそこに綴られている世界の時の流れと光、一瞬一瞬に深く引き込まれ、魅了されていきました。そしてその中の一篇を読み、過去に自分はこの人の詩を読んだことがあり、それが中学生時代の国語の教科書だったと気付いた時、変わっていく生き物である人間が一冊の本を読んだ時、一度読んだからともう読まないのではなく、しばらくして前とは違ういろいろと成長した自分が読んでみる、またたとえ近い自分でもその時の気分や周囲の環境によって同じ一つの文章から受けるヴィジョンとその文の価値は全く違うのだということ、それがとても大切であるということを知りました。それ以来私は以前に読んだことのある本をしばらくたってからまた読み返してみる、ということをよくしています。特に中原中也の詩集を。

「汚れちまった悲しみに…」この一行は私に他のたくさんの思想書や哲学書よりも多くのことを考えさせました。汚れた悲しみ、それはどこまでいけばそうなるのか、今の自分も持つものなのか、そうなった時、果たして自分は何を想うのか、など。彼のつぶやくような一言一言は常に私の心に存在し続けているのです。

一生「月給取り」にならず夢見る人だった彼。そういう人間は現実を認めようとしません。当然自分自身も。「お前は何をして来たのだと…、吹き来る風が私に言う。」認められない、満足することのできない自分を抱えて故郷と向き合った時、彼は時の過ぎ行く速度と現実のもどかしさ、そしてやはり何よりも自分自身へ思いを馳せたのではないかと私は思います。そして向き合った故郷へ背を向け再び歩き始

める、それこそが「詩」と呼ばれるものなのではないでしょうか。異郷（現在）に身を置いていながら、心は故郷（過去あるいは未来）に向かっている、彼の詩を読んでいていつもそう思います。自分のことを綴るときでさえ、彼は自分を見ながらその自分の向こうにいる自分を見ているような、それが彼の詩の悲しみの旋律を作り出しているのでしょうか。詩人は未来に過去を夢見て生きています。もう二度と帰り来ぬ絶対的な瞬間、過去はたいがい良い思い出と印象を残すものですし、多分に美化されるものですが、それが彼を支え、つらい思いにもさせ、それを抱えて生きることにより、あれほどの詩を残せたのだと思います。

人の心を打ち、いつまでも心に残る言葉、それはいつでも悲しいつづやきのような一言だったのかも知れません。偉人の立派な言葉も名言と呼ばれる言葉も、日常のほんの一瞬に詩情に捉われた人間の心にはあまりに立派すぎて、自分の心を偽り、強気になりすぎているようで。そんな人の心に何の違和感もなく、やさしい母性のように傍にいてくれるのが心の一言なのです。自分の生きているこの現実世界の真実、「何か」を感じた時、ざわめく感覚と落ち着かない心に何の重荷もなく彼の詩が聞こえ、私は「随分損なわれてはいるものの、今でもやさしい心があって、それが静かに呟き出すのを、感謝にみちて聴きいる」のです。私が「私」として生きる以上、これからもずっと中原中也との付き合いは続くのでしょうか。人として手放せない大切な「親友」と。



審査委員から一言

薬学部教授
紺谷 仁

本離れが言われているとき、読書感想文コンクールに作品が集まるか、非常に心配でした。それは私の杞憂で、予想を超える多くの応募作品が集まりました。読ませていただいた中で、辺見 庸『もの食う人びと』の文章に私は動かされました。借りて読みました。自分が大学生のとき、なにかの偶然で読んだ五味川純平『人間の条件』、友人に勧められて読んだ高橋和巳『邪宗門』の時の思いが、30余年ぶりに沸き上がってきました。同じく参加作品中の鈴木常勝『上海コロッケ横丁』も読んでみようと思います。審査員に選出していただき、知らなかった作家と本の出会いをいただき、「ありがとうございました。」という気持ちです。

平成13年度におけるライブラリーセンター図書の利用の多かった院生・学生の皆さんを発表・公示

標記に係る皆さん、本館29名、分館10名をライブラリーセンター内で発表・公示しました。平成14年度もより一層のライブラリーセンターのご利用を期待しております。

優秀賞

「人との出会いが示すもの」

坂本 紀子



書名 『さぶ』

著者 山本周五郎

出版社 新潮社

この本を読むのは二度目だった。一度目は私が高校生の頃に読書感想文の課題で義務感から読んだものだった。やる気のなかった私は、中をとばし読みして作文を提出した。だから内容はほとんど覚えていなかった。だからこそ、今度は義務感からではなく、物語を楽しんで感想文を書きたいと思いこの本を選んだ。

「さぶ」という題名がついていながらもこの物語の主人公は栄二である。舞台は江戸時代、男前で器用で賢く、老若男女問わず好意を持たれる栄二と、ぐずでのろまで能無しの、これはさぶ自身の自己評価だが、けれども誠実で優しい心を持つさぶ。正反対の性格を持ちながら、二人は無二の親友である。二人はお互いに不幸な境遇で育ち、経師屋『芳古堂』に住み込みで働き、職人を目指している。

私はこの二人の関係が好きだ。さぶは栄二の友達であることを誇りにして、いつも自分は栄二の重荷になっていないかを気にしているが、栄二はそんなさぶを見下すことなく「いつも気持ちを支えてくれる友達だ」といって互いに互いを評価し尊敬しあっている、そんな仲であることが大変うらやましく思う。

しかし、栄二の人生の転機になる事件が起こる。栄二に得意先の『綿文』で金襴を盗もうとしたという容疑がかかるのだ。もちろん栄二は無罪なのだが、そのことで栄二は「人を素直に信じられなく」になってしまうのだ。

栄二は本当に孤独であったのだと思う。本当の孤独というのは、自分の周りから人がいなくなるのではない。自分自身が人を寄せ付けなくなったときのことをいうのだと思った。十年以上も勤め、信頼しきっていた親方から店を追い出され、奥の人とも親しく付き合いをしてきた『綿文』からは暴力を受ける。どんなに悔しかっただろう、私には想像すらできない。栄二の「無実の人間にぬすつとの汚名をきせただけではたりず、ゆすりかたりのように扱うのか」という文句は私の心に深く響いた。

その後、「人足寄場」に送られた栄二は始めのうちにはかたく心を閉ざしているが、自分と同じように世間に愛想がついた人々との交流を通じて、事件が起こる前の自分はどんなにうすっぺらい人間であったかということを考えるようになる。

この「人足寄場」での話は飽きることがない。しかし少しずつではあるが確実に栄二の心を溶かしていったのはさぶだったのだと思う。さぶは行方知れずだった栄二を探しに探しやっと思いつけ出し尋ねてきた。栄二はそんなやつは知らないと言ってはねのけるのだが、その夜にこみ上げてくる涙を懸命に抑えるのである。私は栄二が泣いたのはきっと人の温かさに触れたからだと確信する。栄二は自分が一人ではないのだとわかり安心して涙がこみあげてきたのではないかと思えるのだ。そしてその時はすでに栄二は孤独ではなくなっていたのだと思う。

「人足寄場」からでた栄二は事件前から密かに想いを寄せ合っていたおすえと結婚し、さぶと3人で経師屋の店をもつ。そして物語の最後に事件の真犯人が明らかになる。

私は読むのが二度目だったので犯人は誰だか知っていた。読み終えた後、犯人を知らないままで読みたかったと後悔した。犯人は栄二の妻であるおすえだったのである。私は彼女のせつない恋心を理解できたとしても、彼女のした行為は評価できない。しかし、寄場での栄二の成長を知っているからこそ、彼がおすえを許す気持ちを理解できてしまう。というのも寄場を通じて栄二は自分に同情することをやめ、自分を見つめる目を持ち、他人を理解する心を持ったのである。寄場での出会いは栄二をより優しく、そしてより厳しい人にしたのだと思う。私もそうある人になりたい。

この物語で私は、人は一人では生きられないということを再確認した。栄二にはさぶという心の支えとなる人間がいた。独りよがりになっているときに忠告してくれるおのぶがいた。落石事故で死にかけたときに損得勘定なしで助けてくれた大勢の仲間がいた。この物語は二十歳という節目の年を迎えた私に、これまでをふり返り、考えるきっかけを与えてくれた。そこにやはり、物語に幾度となく出てくる「人間は一人ではない」という言葉があった。どの人にも自分の良いところをのばしてくれる人がいて、悪いところを気付かせてくれる人がいる。それが親であったり、友人であったり、先生であったり...栄二からすれば私はまだ“事件前”のうすっぺらい人間だろう。しかし、人との出会いの大切さを知った私は以前より厚みをました、そんな気がするのだ。



審査委員長から一言

外国語学部教授
村上良夫

「読書感想文コンクール」という新しい試みに、多数の学生諸君が、それも全学部からチャレンジしてくれたことを感謝しています。

どんなふうに読んだか、読むことによって何を得たか、得たものをどのように表現しているか といった点を主な基準として審査にあたりました。入賞作品はそれぞれ、

しっかりとした内容の本をきちんと読み、考え、そこでつかんだものを自分の言葉で、自分の持ち味を生かしつつ一貫して明瞭に述べています。そうしたところが全体的総合的に評価されたわけです。

活字離れ・読書離れの時代にあっても、しっかり読書している若者たちがいることを知り、たいへん心強く、頼もしく思います。読書は著者との対話であり、思索し成長していくことです。若いうちに、できるだけ多く良書に取り組んで、力をつけ、自分を伸ばし、ますます成長していきましょう。次回はさらに多くの諸君から、さらに多くの力作を期待しています。

北陸大学オープン大学

織作峰子の写真術

受講者による写真展開催

平成13年10月15日(月)から10月31日(水)まで、ライブラリーセンター1階のギャラリーホールで、「織作峰子の写真術」の受講生約20名の写真展を開催しました。

大勢の皆さんが、素晴らしい芸術の鑑賞に浸っていました。



編集後記

皆さんの益々の読書欲の増進とライブラリーセンターのより多くの利用を願って、収録のように、第1回北陸大学読書感想文コンクールを開催しましたが、今年度は、第2回目を実施する予定です。是非とも、昨年度以上の多数の学生諸君が応募してくれるよう期待しております。



CONTENTS

第1回「北陸大学読書感想文コンクール」 入賞者10名を表彰.....	1
表彰式挨拶	2
最優秀賞感想文	3
寄贈図書	4
優秀賞感想文	5
平成13年度におけるライブラリーセンター図書の 利用の多かった院生・学生の皆さんを発表・公示 ...	9
オープン大学 織作峰子の写真術 受講者による写真展開催	12

北陸大学ライブラリーセンター報
NO.13 1st-Half 2002

平成14年4月10日発行

編集・発行：北陸大学ライブラリーセンター
〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1
TEL . 076-229-3021
FAX 076-229-4850

ライブラリーセンターEメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp
北陸大学ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/

印刷：カンダ印刷株式会社